虚子記念文学館投句特選句・令和二年五月

稲畑汀子　選

豆飯やぐち一言も云はぬ母　兵庫　田中良子

若かへで空にぺつたり貼れさうな　神奈川　進藤剛至

ふらここや夕餉の香り母の声　神奈川　平野政良

畑を越え田を越え祭囃子かな　兵庫　小杉伸一路

角ふたつ曲がれば川辺花楝　兵庫　玉手のり子

軒を出て宙をすべるや夏燕　愛知　中野ひろみ

軽やかなピアノの調べ薔薇の庭　千葉　玉井令子

湖に淡き影曳く夏の月　大阪　河辺さち子

松蟬の四方より囃す山路かな　兵庫　田村惠津子

朝靄の古都紫陽花の藍滲む　東京　土々

入選句・令和二年五月

茶を摘める人へ雀の声を蒔く　京都　杉森大介
目閉づれど想ひは尽きぬ花の月　東京　三球
湖光りつつ万緑にしたがへり　香川　福家市子
コロナ禍の籠り居庭の蕗料り　大阪　田中靖子
更衣あへての心晴るる色　香川　大山孝子
衣更へて外出の日々を待つてをり　兵庫　池田雅かず
新緑や深呼吸又深呼吸　大阪　須知香代子
若葉風病み抜けし夫送り出す　愛知　村瀬みさを
薫風や庭の俳磚淋しめず　兵庫　奥田好子
虚子館の緑に抱かれ歩みたし　兵庫　川村ひろみ
海沿ひの道はアカシヤ花盛り　石川　辰巳昌彦
こんなときこそ学ばねば明易し　石川　辰巳葉流
岬の空松蝉の声降り頻る　石川　牧野妙子
頬杖を解いて決断薔薇薫る　兵庫　岩水ひとみ